

Title	ボランティア研究の展開 : 物語の設計科学に向けた議論
Author(s)	渥美, 公秀
Citation	ΣYN : ボランティア人間科学紀要. 3 P.7-P.16
Issue Date	2002
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/3282">http://hdl.handle.net/11094/3282</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ΣΥΝ (ボランティア人間科学紀要) 第3号 (2002年) 別刷

Syn (The Bulletin of Volunteer Studies) Vol. 3 (2002)

# ボランティア研究の展開

—物語の設計科学に向けた議論—

渥美公秀

大阪大学大学院人間科学研究科

ボランティア人間科学講座

# ボランティア研究の展開

## —物語の設計科学に向けた議論—

渥美公秀

(地域共生論)

### 要約

グループ・ダイナミクスによってボランティア研究が深まることを示した。まず、グループ・ダイナミクスを物語—設計科学として位置づけた。次に、グループ・ダイナミクスに基づくボランティア研究を概観した。

キーワード：グループ・ダイナミクス、物語科学、設計科学、ボランティア

ボランティア研究は、グループ・ダイナミクスのアプローチが首尾良く使える分野である。グループ・ダイナミクスは、集合体の全体的性質（集合性）のダイナミクスを明らかにする人間科学である。グループ・ダイナミクスでは、研究者と当事者との間に一線を画することができないという姿勢を持って、参与観察を中心とした方法によって、研究者と当事者が、協働で紡ぎ出す物語を記述し、現場に対して何らかの変化をもたらすことを目指す。こうして「よい理論ほど実践的なものはない」という言葉をモットーにアクションリサーチを展開してきたグループ・ダイナミクスの研究実践の姿勢は、ボランティア研究にこそ求められる。本稿では、ボランティア研究をグループ・ダイナミクスの1つの分野と捉えたときに、その将来の展望を描くものである。まず、グループ・ダイナミクスを諸科学の中に位置づけて、今後の研究の方向を指し示す(第1章)。次に、グループ・ダイナミクスにおけるボランティア研究の現状をレビュー<sup>1</sup>しながら、第1章で示した方向に向かう具体的な研究(案)を提示する(第2章)。

### 第1章 グループ・ダイナミクス—学問としての位置づけ<sup>2</sup>

社会学者の吉田民人氏が、学問分野の再編成という視角から興味深い議論を展開しておられる。ここでは、吉田(1999、2001)に依拠して、学問分野の見取り図を描き、その中にグループ・ダイナミクスを位置づけてみたいと思う。

吉田によれば、学問は、2つの基準を用いて、大きく4通りに分類できる(表1)。まず、第1の基準は、当該学問が、法則の解明を目指すのか、それとも、(法則を制約条件としながらも)現象をコントロールしているプログラムの解明を目指すのかという基準である。前者は、17世紀以降の近代科学が、自然界のすべての要素は物質エネルギーのみであると考え、その秩序原理としての法則とその論理・数学的構造の解明に当たってきたことに対応している。このように法則の解明を目指

<sup>1</sup> 社会心理学との関係は、本稿におけるレビューをその一部に含む一般論文(渥美、印刷中)に示した。

<sup>2</sup> Atsumi(2001)で示した着想をもとに展開している。

す科学を「法則科学」と呼ぶ。その代表には、物理学や化学がある。一方、分子生物学の興隆を契機として、物質エネルギー以外のもう一つの根元的な要素としての「情報」が“発見”され、「設計図のない世界から、設計図のある世界へと変化した(1999, p.53)」ことによって、もう一つの学問が生まれた。それは、「プログラム科学」と呼ばれ、生物科学と人文社会科学が含まれる。もちろん、生物科学も人文社会科学も、物理や化学の法則に左右されはする。しかし、法則は制約条件あるいは拘束条件にすぎず、研究対象は、生命現象や社会現象をコントロールしているプログラムである。生物科学は、意味の世界を直接採り上げるわけではないので、「シグナル性のプログラム」を扱う分野とされる。一方、人文社会科学は、意味の世界を通じて発現しているプログラムを対象とするので、「シンボル性のプログラム」を対象としている。

表1 グループ・ダイナミックスの位置づけ

	認識科学	設計科学
法則科学	物理学 化学	工学
プログラム科学 (物語科学)	生物学	生物工学
	人文科学 社会科学	政策科学 社会工学 グループ・ダイナミックス

(吉田,1999より、渥美が作成)

第2の基準は、当該学問が、研究対象をあるがままに見て、記述し、説明を加え、さらに予測を行うという立場に立っているか、あるいは、研究対象のあるべき姿を構想し、設計して評価し、実践に結びつけていこうという立場に立っているかという基準である。通常、前者が研究者の仕事であり、後者は、政治家や経営者の仕事であると考えられがちである。しかし、吉田は、「少なくとも、あるべき姿、あってほしい姿を構想し、設計し、評価するという仕事を、科学者の仕事として認めたい(1999, p.57)」と主張する。こうした科学を「設計科学」と呼んで、従来の「認識科学」と峻別する。

吉田が情報に注目して、プログラムを着想し、そこに意味の科学を見たことの意義は大きい。ここでは、プログラムという言葉（広義の）物語と置き換えてみたい。吉田自身も「基本的に人間社会の中核は、言語によって担われたプログラムによって制御されているのではないか(1999, pp.55-56)」と述べているが、ここでいう「言語によって担われたプログラム」とは、物語のことではなかろうか。物語は、狭義には、視点の二重性、出来事の時間的変化、他者への志向（浅野、2001）といった要素を含む陳述ないし言説であろう。一方、社会構成主義の文脈では、現実があるから物語が綴られるのではなく、物語が紡ぎ出されることによって現実が構成されるのであるといった立場から、様々な言説（例えば、Wooffitt, 1992）や記憶（例えば、Middleton & Edwards, 1990）などの分析を行う場合がある。また、グループ・ダイナミックスにおいても、会話がデータとしての可能性を持つことも指摘されてきた（渥美,1996）。ここで扱われる言説、記憶（想起の言説）、会話なども含め

て、広義の物語<sup>3</sup>と呼ぶことにすれば、物語はまさに社会におけるプログラムである。吉田は、設計図という比喻を用いてプログラムを論じているが、物語は、設計図という空間的な比喻に、いわば時間的な広がりを与えるがゆえに、第2の基準で示された設計科学にも馴染みやすいと考えられる。

この分類に従うならば、グループ・ダイナミックスは、シンボル性の社会科学の1つとして、「プログラム＝物語」科学（以下、物語科学）に分類される。そして、グループ・ダイナミックスの初期の諸研究（Cartwright & Zander, 1960）を振り返れば、グループ・ダイナミックスは、設計科学の1つであるべきだった。ところが、「科学」への憧れは、グループ・ダイナミックスがもっていた設計科学への志向を認識科学へと導いてしまい、さらに、物語科学に法則科学への憧憬を植え付けてしまった。グループ・ダイナミックスは、物語科学としてのアイデンティティを取り戻し、認識科学から設計科学への転換を図るべき時に来ている。具体的には、人々が織りなす物語にもっと目を向け、これまで政策科学や経営学、あるいは、隣接分野でいえば、臨床心理学が目指してきた実践の分野を志向する学問として再興すべきだと考える。

結局、冒頭で書いたように、「ボランティア研究は、グループ・ダイナミックスのアプローチが首尾良く使える分野である」というとき、ボランティア研究が基盤とするグループ・ダイナミックスは、物語科学かつ設計科学である。例えば、あるボランティア活動に参加した人々が織りなす語りを採集する。その分析を行って、物語（プログラム）を明らかにしていく。ただし、その作業は、いかなる実践を志向しているかという設計科学の基準を満たしている必要があるから、何のためにどのような物語を解明していくかということが常に実践的に意識されることになる。無論、こうした研究が現在次々と生まれているなら、ここまで書いてきたような議論をあえてする必要もなからう。グループ・ダイナミックスに基づくボランティア研究は、まだ始まったばかりとも言える。そこで、章を改めて、グループ・ダイナミックスに基づくボランティア研究の現状を整理することにする。

## 第2章 ボランティア研究の現状と展望

本章では、グループ・ダイナミックスにおけるこれまでの研究成果を概観する。その際、当該の研究は、物語科学として広義の物語、プログラム、設計図に着目しているか、そして、単なる認識に留まらず、現状を協働で変化させることを志向した設計科学となっているかということが評価の基準となる。

まず、心理学関係のデータベース PsychInfo を用いて、volunteer, voluntary などの語を含む研究を検索するため、"volunt\*"（\*の部分の語形変化を無視する）というキーワードで、1887年から2001年までの英文論文を検索したところ、21,666件の論文が抽出された。さらに、グループ・ダイナミックス、ないし、社会心理学に限定してみると736件に絞られた<sup>4</sup>。もちろん、本稿で全てを網羅的に

<sup>3</sup>この段階では、物語、語り、談話、言説、対話、会話などの厳密な区別は行わず、「広義の」という表現で曖昧に示している。今後、それぞれの異同を整理していくことも課題ではある。なお、ここでは、定訳とは言えないが、物語は narrative の訳としている。

<sup>4</sup>ただし、これらの検索だけでは、各論文の内容がボランティア活動を中心としたものかどうかはわからない。また、このデータベースに含まれていない学術雑誌もあるので、研究の全貌を把握したとは言えない。もちろん、隣接分野に見るべき研究が埋もれている場合も多々ある。注1も参照のこと。

レビューするわけにはいかないもので、まず、阪神・淡路大震災を契機としたグループ・ダイナミックスの立場からのボランティア研究を概観する。続いて、ボランティアの動機に関する研究に着目し、グループ・ダイナミックスに基づくボランティア研究が物語科学かつ設計科学として成立すべきであることを示す。最後に、設計科学としての諸研究がさらに求められていることを指摘して、今後の研究の展望を示しておきたい。

### 第1節 阪神・淡路大震災を契機としたボランティア研究

ボランティア活動に対し、グループ・ダイナミックスからのアプローチが見られる契機となったのは、1995年の阪神・淡路大震災である。ボランティア元年とまで称され、社会現象となったボランティア活動について、まず現場への参与観察を試み、エスノグラフィーを書くという作業が積み重ねられた。そして、研究者と現場のボランティアが、どのように事態の展開を図りたいのかという目標に向けて、協働的実践<sup>5</sup>を繰り広げ、様々な物語を紡ぎ出してきた (e.g., 渥美, 2001)。以下に紹介する研究は、どれも当事者に向けて語り、当事者からの修正を経て、研究者と当事者が協働で紡ぎ出した物語である。

阪神・淡路大震災直後から、グループ・ダイナミックスの研究者は、救援活動に参加した。当然ながら、学術研究の推進の前に、被災者の救援という課題があり、研究者であるとないと関わらず、まずは救援活動を行ったことは言うまでもない。まず、救援活動の現場から、避難所やボランティア組織のエスノグラフィーが報告された (e.g., 渥美, 1995; 渥美・杉万・森・八ツ塚, 1995; 渥美・渡邊, 1995; 杉万・渥美・永田・渡邊, 1995; 矢守, 1997)。例えば、杉万ら (1995) は、3つの避難所において救援ボランティア活動に携わりながら参与観察を行った。自らも参加した避難所運営をもとに、避難所が、単なる食料や寝場所を確保する場ではなく、避難者が新たな集合性の再構築に向かって第一歩を踏み出せるための安全基地とならねばならず、避難者集合体のニーズが反映される組織化を実現する必要があると指摘した。また、渥美ら (1995) は、阪神大震災を契機に創発的に結成された2つのボランティア組織の組織化過程を比較検討した。その結果、2つのボランティア組織は、地元行政との関係や将来展望について異なる物語を語っていた。その後の研究 (e.g., 渥美, 1997, 2001; 渥美・加藤・鈴木・渡邊, 1999; 渥美・渡邊, 2000; 渡邊・渥美, 2000) では、地域防災活動やボランティアのネットワーク化に関するエスノグラフィーが報告されている。この時点までに、いわば様々な震災譚が語られたことになる。

また、ボランティア活動の現場に依拠した研究から、ボランティアを含む社会の動向を探る研究も見られた。例えば、八ツ塚・矢守 (1997) は、ボランティアの役割に注目しながら、日本社会の変容を5種類のモデルに整理した<sup>6</sup>。この類型はあくまで理念型であり、歴史経過と必ずしも一致するものではない。しかし、阪神大震災時には、既存の企業、行政システムが機能しなくなった中で、本来ならばボランティアとは呼ばれることのなかった活動が、ボランティアの範疇に含まれたこと

<sup>5</sup> 渥美(2001)、杉万(2001)を参照のこと。なお杉万は、共同的実践という表記を用いている。

<sup>6</sup> ①ボランティアが篤志的活動である社会、②ボランティアが補完的役割を果たす社会、③ボランティアが第3セクターをなす社会、④あらゆる活動を「震災ボランティア」が担う社会、⑤既成組織のネットワーク化をボランティアと呼ぶ社会

を指摘している点は、混乱しつつあったボランティア活動の現場に1つの指針を示すことができたと考えられる。また、ボランティアを含む社会の行方について、原理的な追究を試みた研究（渥美、1998）では、「やりたいから」「楽しいから」ボランティア活動に参加するという現象を近代社会の流れの中に位置づけ、そこに、「何かに対する有用性を超えた彼岸における生の充溢と歓喜が隠されている」と指摘した。

こうした物語科学としての現場研究の展開に続いて、設計科学の志向を背景に、ボランティア活動への実践的な提言を含む研究が現れた。例えば、渡邊（2000）は、阪神大震災で改めてその大切さが認識された地域防災について、非営利組織と既存の地域組織との連携による新しい地域防災プログラムを報告した。このプログラムは、従来の地域防災が、地域防災という目的を直接的に掲げる「地域防災を唱える地域防災」であったのに対して、地域防災という目標を戦略的に敢えて掲げない「地域防災とは言わない地域防災」の取り組みであった。このプログラムを理論的に捉え返し、「〇〇とは言わない〇〇」というフレーズで、様々なボランティア活動の現場に報告したところ、日々の活動の指針として受け入れられる場面があり、研究の生成力（渥美、2001）が確認された。

さらに、震災を契機として、改めてボランティアとは何かということが問われたのを承け、ボランティア活動にまつわるキーワードを手がかりに、ボランティアを含む社会について研究が行われた。例えば、渥美（2000）は、ボランティアの基本原則とされる3つの言葉—自発性・無償性・社会性—を疑うことにより、震災以降のボランティアの特徴を明らかにした。例えば、ボランティアの自発性が語られる際、その背後に、新しい市民社会を担う主体として自律した“個人”という理想像や、自発的に社会に貢献すべきであるという道徳観が潜んでいるのではないかと指摘した。また、諏訪（2001）は、市民社会というキーワードの使われ方を分析した。その結果、市民活動団体は、安定した「市民社会像」を共有した上で市民社会の構築を目指しているのではないことが明らかになった。そこで、定義や特徴の定かではない市民社会という言葉を巡って人々が織りなす集合的な行動そのものが市民社会ではないかと指摘した。無論、こうした一連の研究は、まだ緒に付いたばかりであるが、震災からの復興という協働の目標に向けて、研究者と当事者が現場で物語を紡ぎ出してきたことは、設計科学への展開に希望を投げかけるものである。

## 第2節 ボランティアの動機に関する研究

ここで特定の研究テーマにしぼって、グループ・ダイナミックスを基盤とするボランティア研究を概観してみよう。西欧の主要な心理学関係の学術雑誌には、ボランティアの動機を扱った論文（e.g., Clary, Ridge, Stukas, Snyder, Copeland, Haugen, & Miene, 1998; Trudeau & Devlin, 1996）が見られる。例えば、Claryら（1998）は、まず、ボランティア活動への参加動機を「価値の一致」、「理解・学習の機会」、「社交」、「キャリア」、「自我の防衛」、「自己の拡張」という6種類に理論的に分類し、6つの実証的研究を行っている。第1研究では、456人の対象者に対して質問紙調査を行い、因子分析の結果、6つの因子が抽出され、理論的に導いた上記の6種類と対応していることを確認し、ボランティアの動機を測定するための尺度を作成している。第2、第3研究では、ボランティア活動に参加した経験のない人々を対象としたり、2つの時点でデータをとって時間的に比較したりして、尺度の有効性を検討している。さらに、第4～6研究では、動機と一致する呼びかけに応じやすいこ



とや、動機と一致した活動により満足が得られること、さらに、動機と一致した活動ほど継続する傾向があることを見出している。わが国でも、ボランティア活動への参加意図を扱った研究 (e.g., 安藤・広瀬, 1999; 谷田, 2001) が見られる。

しかし、こういった諸研究は、物語科学を志向するというよりも、法則科学を目指しているようである。つまり、動機に関する法則を見出すことに素朴にも邁進しているようである。確かに、今後、調査方法を充実させることによって、よりの確にボランティアの動機が把握できる可能性も残されているようではある。しかし、現場でのボランティアの言説に真摯に耳を傾けるならば、ボランティアの動機は、「語るに語り得ない」(浅野, 2001) のではなかろうか。

グループ・ダイナミックスでは、動機についても物語科学としてのアプローチをとる。Atsumi (in press) は、これまでの心理学が依拠してきた過去志向的パラダイムを批判的に検討し、未来志向的なパラダイムに基づくグループ・ダイナミックスのあり方について、動機に着目した分析をおこなった。ここで、動機は、身体内部に所蔵された心理学的要因などではなく、特定の文脈のもとで構成される物語であるとされた。さらに、設計科学への志向を背景に、動機は、他人(心理学者)の前で、その時その場の実践的目標にあわせて協働的に構成されることを示した。つまり、動機とは、動機を問う者(例えば、研究者)と動機を問われる者(例えば、ボランティア)がその場において協働で構築する物語である。

この物語科学かつ設計科学というグループ・ダイナミックスのアプローチは、著者らのこれまでの試行的な研究(渥美, 1996; Atsumi, 2002; 長谷川・渥美, 1995; 森崎, 2002; 内山, 2002)はもとより、隣接する諸分野における最近の動向と一致する考え方である。これまでにボランティアの動機に直接焦点を当てたものはほとんどない(例えば、星子, 2001)が、例えば、共同想起(collective remembering)の分野では、「人々の過去に関する説明は、特定のコミュニケーション状況を考慮して構築されるもので、実際目的によって変化する」(Middleton & Edwards, 1990)という指摘がある。体験の記憶と報告に関する Wooffitt (1992)の研究では、不思議な体験に関する「記憶の描写は、その描写時点での実践的な状況を考慮して構成される」と指摘している。また、ナラティブ・セラピー研究(McNamee & Gergen, 1992)やライフヒストリー研究(桜井, 2002)では、セラピーやインタビューの場をストーリーを構築する場だと捉えているし、供述分析は、供述が取調べる側と取り調べを受ける側との共同作業によって形成されていくことを明らかにしている(浜田, 2001)。さらに、原理的に自己物語の可能性を追求した浅野(2001)は、自己物語が破綻しつつも他者による承認によってその失敗が隠蔽されることを指摘している。

このように、ボランティアの動機を、物語として捉え、そこに設計科学への志向を加味することによって、より実践的に意義の深い研究が進むものと思われる。その際、他者による承認という場面において、いかなる他者を構想するかということは、次なる理論的な問いとなる。

### 第3節 ボランティア研究の展開

グループ・ダイナミックスが、物語科学として、設計科学を志向するならば、今後、どのような目標に向かって、どのような物語を紡いでいくかということが、グループ・ダイナミックスの課題である。阪神・淡路大震災直後、設計科学への志向はもちつつも、まだ確固とした理論も方法も定



まらないうままに、被災地に飛び出していき、ボランティア活動の現場に身を置くことになったグループ・ダイナミックスの研究者たちにとって、協働で紡ぎ出す物語の語り方や記録の方法は、まだまだ未熟だといわざるを得ない。そんな中で、昨年度の卒業論文として提出された森崎（2002）および内山（2002）は、ボランティア活動に参加した人々の感想や語り資料をもとに、そうした現状を方法論的にも理論的にも超え出ようとする意欲的な試みである。また、Atsumi（2002）では、ボランティアの自己物語の破綻を隠蔽する他者についてさらに考察を深めていくことの必要性を改めて指摘した。

ボランティアに注目が集まった震災から7年が経過した現在、研究者とボランティアとの協働的実践の場において、そもそもどのような言説が紡ぎ出されるのだろうか。もちろん、国家や民主主義といった目標を持ち出して「大きな物語」を語り始めることはできようが、果たして、破綻せずに語り続けることができるだろうか。安定した物語が崩壊しつつある現在、人々はどのような目標に向かって、いかなる物語を紡ぎだしていくだろうか。2001年9月11日に起こったいわゆる同時多発テロは、これからの社会において、容易には協働の目標が設定できないことの予兆である。一方、グローバル化が進行する中で、ローカルで孤立した目標に安住し、安定した物語を語り継ぐことの可能性は日増しに小さくなっている。

今一度、震災時の災害救援の現場におけるボランティアの活動を振り返れば、この問いに対するヒントが隠されているように思う。もはやその詳細を述べる紙幅は残されていないが、阪神・淡路大震災の救援現場では、ボランティアをはじめとする救援者たちがジャズのような即興を演じたという報告（渥美、2001）がある。即興においては、次々とローカルな規範が形成されては崩壊するという現象が生じる。この過程から、よりグローバルな規範が成立するかどうかは偶然に任される。この観察に依拠して述べれば、今後は、ボランティアと研究者との協働的実践の中で、常に目標を更新し、その時その場で、即興的に、ローカルに当事者とともに物語を紡ぎ出すような事態が展開することが予想される。その際、市民社会といった大きな物語が挿入されるとしても、どこかにその安定性を疑う視線が必要であろう。一方、ローカルに構築される物語は、常に、いかにもあっさり書き換えが行われるということをおぼろげに忘れてはならないだろう。さらに、物語を探索するときには、その多声性（バフチン、1963）に注目した分析が必要となろう。ここで、多声性とは、単に複数の声のことではなく、分析者本人が含まれ、相互に他者である複数の他者と対面することだと考えた方がよい。グループ・ダイナミックスから、ボランティア活動にアプローチする場合には、このように様々な言説が交錯する場に居合わせて、いかなる物語を協働で紡ぎ出せるかということが課題となる。いかなる物語が求められているかということに関する物語（メタ物語）を踏まえて、物語科学としてのグループ・ダイナミックスという設計科学を基盤に、さらにボランティア研究を展開していくべきだと考えている。

## 引用文献

- 安藤香織・広瀬幸雄 1999 環境ボランティア団体における活動継続意図・積極的活動意図の規定因  
社会心理学研究, 15, 90-99.
- 浅野智彦 2001 自己の物語論的接近 勁草書房

- 渥美公秀 1995 ボランティアを組織するボランティア—阪神・淡路大震災における西宮ボランティアネットワーク (NVN) の事例 *Business Insight*, 10, 108-125.
- 渥美公秀 1996 グループ・ダイナミックスとデータとしての会話—問題の所在—実験社会心理学研究 36,1,142-147.
- 渥美公秀 1997 広域ボランティア組織の展開 神戸大学〈震災研究会〉(編) 苦闘の被災生活 神戸新聞総合出版センター Pp. 287-300.
- 渥美公秀 1998 ボランティア社会の行方 *組織科学*, 31, 27-35.
- 渥美公秀 2000 ボランティア研究の射程 *ボランティア学研究*, 1, 57-71.
- 渥美公秀 2001 ボランティアの知—実践としてのボランティア研究 大阪大学出版会
- Atsumi, T. 2001 Group dynamics in the 21<sup>st</sup> century in the Asian context. Main Symposium, The 49<sup>th</sup> Annual Conference of Japanese Group Dynamics Association, Kumamoto, Japan.
- Atsumi, T. 2002 Unnarrated experiences among volunteers active in disaster. The 25<sup>th</sup> International Conference of Applied Psychology. Singapore.
- 渥美公秀 印刷中 ボランティア活動研究の現状と今後の理論的課題—社会心理学とグループ・ダイナミックス 大阪ボランティア協会
- Atsumi, T. in press. Socially constructed motivation of volunteers: A theoretical exploration. *Progress in Asian Social Psychology*.
- 渥美公秀・加藤謙介・鈴木勇・渡邊としえ 1999 災害ボランティア組織の活動展開 神戸大学〈震災研究会〉(編) 大震災5年の歳月 神戸新聞総合出版センター Pp. 357-373.
- 渥美公秀・杉万俊夫・森永壽・ハツ塚一郎 1995 阪神大震災におけるボランティア組織の参与観察研究—西宮ボランティアネットワークと阪神大震災地元NGO救援連絡会議の事例—実験社会心理学研究, 35, 218-231.
- 渥美公秀・渡邊としえ 1995 避難所の形成と展開 神戸大学〈震災研究会〉(編) 大震災100日の軌跡 神戸新聞総合出版センター Pp. 82-90.
- 渥美公秀・渡邊としえ 2000 被災地での5年間—日本災害救援ボランティアネットワークの経緯と理論的整理 杉万俊夫(編著) フィールドワーク人間科学 よみがえるコミュニティ ミネルヴァ書房 Pp. 183-221.
- バフチン, M. 1963 ドストエフスキーの詩学 望月哲男・鈴木淳一(訳) 1995 ちくま学芸文庫
- Cartwright, D. & Zander, A. (Eds) 1960 *Group dynamics: Research and theory*. 2<sup>nd</sup> ed. Row Peterson.
- 三隅二不二・佐々木薫(訳編) 1969, 1970 グループ・ダイナミックス 第2版 I・II 誠信書房
- Clary, E. G., Ridge, R. D., Stukas, A. A., Snyder, M., Copeland, J., Haugen, J., & Miene, P. 1998. Understanding and assessing the motivations of volunteers: A functional Approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 6, 1516-1530.
- 浜田寿美男 2001 自白の心理学 岩波新書
- 長谷川麻紀・渥美公秀 1995 会話データにおける分析視点の移動に関する試論 第43回日本グループ・ダイナミックス学会年次大会報告論文集
- 星子ユリ 2001 現代社会におけるボランティアの動機—バタイユの〈消費〉概念からの考察

- 大阪大学人間科学部卒業論文
- McNamee, S. & Gergen, K.J. *Therapy as social construction*. 野口裕二・野村直樹(訳)、ナラティブ・セラピー：社会構成主義の実践 金剛出版
- Middleton, D. & Edwards, D. 1990 (Eds.) *Collective remembering*. London: Sage.
- 森崎偉子 2002 災害ボランティアの「語り」に関する一考察 大阪大学人間科学部卒業論文
- 桜井厚 2002 インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方 せりか書房
- 杉万俊夫 2001 グループ・ダイナミックスの理論 中島義明編 現代心理学「理論」事典 朝倉書店 641-659.
- 杉万俊夫・渥美公秀・永田素彦・渡邊としえ 1995 阪神大震災における避難所の組織化プロセス 実験社会心理学研究, 35, 207-217.
- 諏訪晃一 2001 市民団体にとっての「市民社会」－神戸・阪神地域における市民活動の現在－ 大阪大学人間科学部卒業論文
- 谷田 2001 福祉ボランティア活動をする大学生の動機の分析 社会福祉学, 41, 2, 83-94
- Trudeau, K. J., & Devlin, A. S. (1996). College students and community service: Who, with whom, and why? *Journal of Applied Social Psychology*, 26, 21, 1867-1888.
- 内山志保 2002 語り得ぬ体験に関する一考察－エコツアー参加者たちの感想から 大阪大学人間科学部卒業論文
- Woolfite, R. 1992 *Telling takes of the unexpected: The organization of factual discourse*. Prentice Hall/Harvester Wheaysheaf. 大橋靖史・山田詩津夫(訳)人は不思議な体験をどう語るか 大修館書店
- 渡邊としえ 2000 地域社会における5年目の試み－「地域防災とは言わない地域防災」の実践とその集団力学的考察－ 実験社会心理学研究, 39, 188-196.
- 渡邊としえ・渥美公秀 2000 阪神大震災の被災地における「まちづくり」に関するフィールドワーク－西宮市安井地域の事例－ 実験社会心理学研究, 40, 50-62.
- 矢守克也 1997 阪神大震災における避難所運営－その段階的変容プロセス－ 実験社会心理学研究, 37, 119-137.
- 八ツ塚一郎・矢守克也 1997 阪神大震災における既成組織のボランティア活動－日本社会とボランティアの変容 実験社会心理学研究, 37, 177-194.
- 吉田民人 1999 近代科学の再編と安全学 21世紀の関西を考える会 人類存続の条件, 39-60.
- 吉田民人 2001 科学論の情報論的転回：総合科学政策における人文社会科学の位置づけ 現代思想, 2001年9月号, 8-45.

# **Taking a New Turn of Volunteer Research: Toward Narrative-Design Science**

Tomohide ATSUMI

## **Abstract**

The present study demonstrated that group dynamics could make research on volunteer activities very fruitful. First, group dynamics was categorized into a narrative-design science. Second, previous volunteer studies based on approach of group dynamics were reviewed. It was suggested that more narrative-oriented research with practical perspectives are needed in the studies of volunteer activities.

**Key words** : group dynamics, narrative science, design science, volunteer